

平成3年10月19日
日本医事新報 No. 3521

「痴呆」という言葉、「呆け」という言葉
- 敬老の日に寄せて -

井手 佐武郎

ここ数年、お年寄りの患者さんや、その家族の人達と接触する機会が多くなっている。そのせいか、今迄はさほど感じていなかった「痴呆症」「呆け老人」などという言葉が、公用語、医学用語として氾濫していることが気になり出して来た。

人生の終末期にある老人の何パーセントかにおこる精神障害をさして、なんといういたわりのない、見苦しい表現であろうか、このまま見すごしてよいものだろうかと考えるようになった。そして、本当に考えるに値する事柄かどうかを見究わめることから始めることにした。

手初めに、近くの区立図書館に行って、中級以上の国語辞典、漢和辞典の「痴呆」の項を検討した。二カ所の図書館で二三点だった。以下、これらを発行年代順に列記する。

新字鑑（昭二八）、辞海（昭二九）、広辞苑（昭三〇）、広辞林（昭三三）、角川漢和中辞典（昭三四）、言林（昭三六）、角川国語辞典（同）、大辞典（昭三八）、字源（昭四〇）、三省堂漢和中辞典（昭四二）、岩波国語辞典（昭四四）、新修漢和大辞典（昭四五）、新辞源（同）、大言海（昭五一）、学研漢和大辞典（昭五七）、学研国語大辞典（同）、新潮国語辞典（同）、旺文社漢和大辞典（同）、大辞林（昭六三）、漢字源（同）、²¹三省堂国語辞典（平成一）、²²日本語大辞典（同）、²³朝日現代用語知恵蔵（平成二）。

この作業で分かったことは、次の二点であった。

- (1) 「ばか」「あほう」「おろかもの」等とだけ記述しているもの一〇、医学用語との併記が一、医学用語のみは僅かに二点（^{22 23}）であり、いずれも医学者が編集者として名を連ねている。
- (2) 発行年代順に列記してみたものの、年代的には余り有意差は認められず、編者が国語学者か中国文学者であるかによって、医学用語として認めているか、いないかに分れている。

それならば、痴呆（または癡呆）という言葉が、西洋医学を基とする日本医学の中で、いつの頃から出現したのであるかと思ひ至って、母校 - 慈恵医大 - の大学図書館に行ってみた（迂闊だったのは、母校は大正一二年の関東大震

災によって全焼したということ、すっかり失念していたことだった)。

まず医学辞典から始めた。現在多用されている「痴呆」の語源は、紛れもなく「Dementia」であり、明らかに「精神障碍」または「知能障碍」である。僅かに残存している古い辞書を探し出した。

(1) 医語類聚(明一一): Dementia, 狂の一種。

(2) ノイエスメデチニッシュウエルターブーフ(明三五。金原医籍店): 全癡 瘋癲、癡呆。

(3) 臨床医学辞典(明三六。南山堂): 痴呆、瘋癲。

(4) 独羅英和新医薬大辞典(大一二。金原書店): Dementia, 癡癲狂、D. Seniles, 老人性癡呆。尚、独逸医学辞典(明一九)には Dementia の記載はない。

大学図書館一階に広大なスペースを占めている「医学中央雑誌」(明治三六年初刊、現在に至る)の精神科の「痴 - 癡呆」に関する文献を、昭和八年に至る三六巻に目を通した。他科に較べて数少ない精神科文献の中で、白痴、癡愚、痴鈍、瘋癲等々の文字の多さに、たじろぐばかり。たとえば第六巻(明四一。七五〇頁)「白痴の病理解剖云々」「一九才懦弱性癡愚男子云々」。

すっかり気が重くなった作業を進めているうちに、第九巻(明四四 - 四五)の門脇真枝の論文(第三回日本医学会誌)中に、

《精神病学の訳語に就きて所謂「癡呆」又「癡狂」と云う病名の使用を廃すべきこと。

癡呆又は癡狂と云う病名は字義不穩当にして之が為世間及び患者の嫌忌誤解を来し加え、元来癡と云う字は絶対汚缺を意味するものなるが故に…… 以下略》

という文章に出遇った時の感動を小生は生涯忘れないだろう。

第一五巻(大六 - 七)「老虐性痴呆」と題する東大・呉秀三教授の講義、つづいて第一六巻に同病の標本供覧「アルツハイマー云々」、第三五巻(大七)東大・三宅鑛教授の「老衰期に現れる精神異常、初老期精神病、アルツハイマー」といった演題が目について来たところで、医学中央雑誌の拾い読みを打ち切った。

結局どうということもなかった。明治の初めの頃、西洋医学が日本にどっと流れこんで来た時代、日本では精神病は厄病視され、あらゆる侮蔑的な言葉を用いることに、官界も多くの医学者達も、ためらうことがなかったということなのだ、小生は知った。

「ばか」「あほう」を和英辞典で引けば、fool であり、idiot であって、決して dementia ではないはずである。時代の風潮がそうさせた、心ない多くの医学者がそれをうけついで来た、と小生は思う。

そこで話を現在にうつすことにする。

精神医学大事典(講談社、昭五九)S 教授によれば、《「知能障碍」: 知能がな

んらかの原因で障害され低下すること。軽度、中等度、重度の障害に分けることが出来る。重度のものを「痴呆」という》とあるが、「重度」の説明に「痴呆」という語句は唐突であり、無用ではないか。

メンタルヘルス解説事典（中央法規出版、昭六二）《痴呆とは成人に起こる知能障害で通常の生活に支障を来すほどの重篤なものを云う - 中略 - 高齢期になるにしたがって出現頻度は増加する》。この場合、病態の説明は明快であるが、これまた「痴呆」という字句を用いる必要性は認められない。

同じ事典の H 教授の論説中、《“ぼけ”と云う用語はもともと通俗語であるため、人によって多様な意味に使用されている。“ぼけ老人”という場合は痴呆をもつ老人と同義であり、健康な老人の体験する“もの忘れ”と、“痴呆”の間を指す学者もいる。最近では、むしろ広く高齢者の著明なもの忘れを意味し、“痴呆”を含んだ広い概念として使う人が多いが、厳密な用語とは云えないので、なるべく使用しない方がよい》とあるが、“ぼけ”が俗語であるからと言うのなら、“痴呆”は何語とおっしゃるおつもりか。

“ぼけ”とは、“呆け”であり、語意は矢張り「ばか」「あほう」であるが、更に広くぼかす、あいまいにする、とぼける等々と転用もされている、一種ユーモラスなニュアンスを持つ言葉でもある。近頃の流行語「ファジー」な用語であり、精神科領域で用いられるのにも至極便利な言葉だったのだろうと小生は思っている。

ここ数ヶ月は、小生にとって「痴呆」という言葉との苦闘の日々であった。とにもかくにも、それに終止符を打つ。

うつろな安らぎ、とでもいうのだろうか。戦後世代が人口の三分の二にもなった現在、「痴呆」という言葉にすっかり馴らされてしまって、何とも感じない人々の方が多くなっている。諦めるしかないのだろうか。

〔附記〕 岩波国語辞典（一九六九年版）から「痴」の項を抜粋する。《頭の働きがにぶい。思慮分別が足りない、ぬけている。おろか。「痴愚・痴鈍・痴呆・痴者・痴人・愚痴・白痴・音痴」。特に色情についていう。「痴漢・痴情・痴態・痴語・情痴」》。